

今週のメニュー

■トピックス

- ◇「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム」
－21世紀の住宅の外皮を語るシンポジウム－

■随想

- ◇びっくり闘病記（その6）－夜の不安と闘う時間－

関東学院大学 織 朱實

■編集後記

■トピックス

- ◇「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム」
－21世紀の住宅の外皮を語るシンポジウム－

塩ビ工業・環境協会主催の住宅の外皮に特化した「環境時代のビルディングエンベロップを考えるシンポジウム」を、11月12日午後東京大学武田先端知ホールで開催致しました。

当日は、前日から降り続いた雨も、シンポジウムの開催を待っていたかのようにあがり、晴天の中で行うことができました。300名近い参加者の熱気の中、各専門分野の研究者の講演とパネルディスカッションを通じて、省エネ、CO2削減、長く使っていける住宅などの問題解決に外皮が果たす役割を探りました。

冒頭の挨拶で、コーディネイターを務めていただいた建築研究所の坂本雄三理事長より、21世紀の環境時代というキーワードを手がかりに、主として外皮の熱性能、耐久性、防火性などの性能面から議論をするために、環境工学、材料工学、住宅設計のそれぞれの立場から、3人の先生に現状の報告と将来像について報告をいただき、その後、パネルディスカッションでの議論へと進み、参加者の現状認識が共通化され、問題点が少しずつ整理されるように始めたいと宣言されました。

最初に行われた北海道大学・羽山教授の講演「健康と安全を支える住環境」では、住宅の室内環境の寒暖分布のばらつきが、心疾患や脳疾患、入浴轢死など不慮の事故に深く関与しているかを諸データから説明された上で、改善するためには、内窓の設置等による住宅の断熱・気密化が有効であると述べられました。その為に、消費者は賢く高い要求を持ち、ビルダーは、それに答える技術力を持たなければならないと強調されました。

次に行われた東京大学・野口准教授の講演「外装材のサステナビリティ」は、サステナブル社会に建築材料がどう貢献できるかを説明し、『そのために環境配慮、耐久性、省エネ性、視覚性など多くの性能が建築材料に要求される時代となった。その要求に答えるべく、建築ゲノム構想（ナノレベル化学成分を遺伝子とみ



シンポジウムの様子

なし、その形質や情報を制御することで建築の性能と一生を制御するという考え方)に着手した』と報告されました。その遺伝子操作で建物を制御する、夢のようなことが実現するかもしれないと述べられました。

最後に行われた(株)ミサワホーム総合研究所・栗原取締役の講演「スマート化における住宅の基本性能の重要性」は、スマートハウスの基本は外皮の強化でありそれをした上で設備機器等を設置していくべきと述べられました。事例を提示され、窓、壁の断熱、庇や軒の工夫、欄間や排気塔などの住宅本来の外皮性能を向上させた上で、太陽光や風力、地熱などの自然エネルギーの利用や給湯器などの設置が必要であると説明されました。

第2部のパネルディスカッションは、第1部で講演のなかったアーキキャラバン建築設計事務所の神田主宰より「住宅の寿命と性能」について、本物の材料を使うことをあげた上で、材料メーカーや研究者は、素材の特性をいかした製品の開発を期待していると述べられました。また、塩ビ製品についても軽量で、耐久性のある樹脂サイディングなどは塩ビらしさを生かした製品であり、改修の衣替えには良い素材であるとの見解を示されました。



パネルディスカッションの様子

各パネラーからは、「入浴轢死(年間約6000人)は、自動車事故の死亡者数と同じだが、自動車業界は、涙ぐましい努力で事故を減らしてきた。それに比べ建築業界はどうなっているのか。もっと努力すべき」「高断熱、高気密住宅を普及させるために体感できる場所や効果を定量化する取り組みも必要」「材料メーカーは、素材の特色をよく理解して建築士の要求に即したものを作ること。両社の連携で良いものが出来ていく」などの意見が出されました。

その中で特に私の印象に残ったのは、野口先生が提言された可変的外装材の開発でした。季節によりカメレオンのように意匠的に色が変わるだけではなく、夏涼しく冬暖かく変化する外装材の開発も夢ではないという言葉が頭に残りました。

まとめとして、坂本理事長より「素材らしさを出し、材料の特色を引出し、用途を見出していくなど、これからにつながる話を沢山聞いた。その方向性で建材が開発されていけば環境時代の日本の建築もいい方向に展開していくのではないか。」と締めくくられました。

最後に、閉会の挨拶でVECの宮島理事が、何十年ももってしまう塩ビを生産することは商売として厳しいが、長持ちする建材を生産することで環境時代の建築のお役に立ちたいと締めくくり、シンポジウムは盛況に終了しました。

■ 随想

◇びっくり闘病記(その6) 一夜の不安と闘う時間ー

関東学院大学 織 朱實

～ 手術終了後 ～

さて、ここまでかなり順調に進んできましたが、術後から翌日明け方までは、本当に辛かったです。大きな手術経験者の皆さんが言うとおりに、「術後から翌日までが一番辛い」、これは真実だったのですね。幸いなことに、ひどい痛みはなかったのですが、まず「水が飲めないこと」。これは、本当に辛かったです。

看護師さんからは、「翌朝まで水分は取れませんが、ちゃんと点滴をしていますから脱水症状とかは大丈夫ですよ」と言われていたので、健康的には問題がないことは良くわかっていたのですが、病室がやたら暑く、唇がすぐ乾いてしまい、飲めないから余計飲みたくなるのか、とにかく切実に「水が飲みたい!」。口をゆすぐのは許可がでていたので、看護師さんに頻繁にうがいをしてもらい、乗じて、ちょっとだけでも水を飲もう、と思ったのですが、さすがプロです。看護師さんにははすぐ意図を見透かされ、「ゆすぐだけです。飲んじゃだめですよ」とくぎを刺されてしまいました。でも、ちょこちょこ口に入れていました（すみません）。

それ以外に辛かったのは、体中管が通されているので、身動きが取れないこと、肩と首がバンバンに張ること(身動きが取れないから、余計辛く感じたのかもかもしれませんが)。もっとも、術後麻酔が切れて痛みで大変な方に比べれば、痛みがないだけ楽な術後だったのだと思うのですが、動けないというプレッシャーで精神的に追い詰められたようです(ダメ、と思うと、やたらどこか痒くなって、かきたくなるみたいな)。

しかし、この身動きが取れない、水が飲めない、肩背中の張りは昼間の間はまだしのげたのですが、夜になって周りに誰もいなくなってからが本当に辛い時間の始まりでした。不安からなのか、心臓がどきどきしたり、息苦しくなったり、(先生からの「手術のリスクの一つに、呼吸の機能を傷つけることもあります」という説明を急に思い出したりするのです)、暗い病室で手足から血の気がすーっと引いていくような嫌な感じが襲ってきて、何度もナースコールボタンを押したくなりました。

看護師さんから、「酸素濃度が少し下がっているので、酸素吸入器にしましょうね」とか言われると、(全然「大丈夫の範囲ですよ。でも念のため」なのですが)、それだけで心臓がばくばくしてきたり～。「呼吸が止まってしまうかもしれない」というのは、大変な恐怖なのですね。

「こういうときこそ、腹式呼吸だ!バリ島のバリヤンの先生のいっていたことを思い出せ」で、ふっふっは一、ってラマーズ式呼吸を夜中の病室で一人行い、不安を和らげようとしたのですが、「こんな夜中に、ひとり、脊髄切って、10何年ぶりにラマーズ法やっているなんて～」ちょっと情けなくなりました。出産のときも全然うまくいかず、たまに習うヨガでも呼吸法は全然ついて行っていないので、こんなときにももちろん上手いくはずがなく、やればやるほど、心臓がばくばくして「息ができないような気がする・・・。」状態に。

「早く、早く、朝6時になってくれ～」という感じでした。

時間の経過がやたら遅い暗闇の中で思い出したのは、中西準子先生の読売連載の自伝の記載。政治運動をなさっていたお父様が、中西先生に「準子、捕まった時には、一晚耐えればいいんだよ」と話されています。いわく、一晚耐えれば、仲間に逮捕されたってわかるから、みんな隠れるので影響



公園内にはコスモスの中、巡回電車

がない。だから、拷問は一晩耐えればいいんだ、とのこと。「そうだ、とにかく一晩だ！」そうは思うものの、時間が経つのがなんと遅いことか。

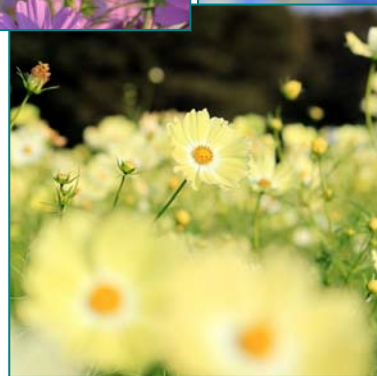
こんなとき、どうやって時間をやり過ごせばいいか。公安小説で、拷問に耐える方法として、頭の中で「家を土台から組み立てる」というのがあって(北朝鮮のスパイの人もそういう訓練を受けているらしい)、私も普段とでもつまらない会議とか、長くて長くて困ってしまうようなときには、自分の着物を思い出し、それに帯とか半襟の組み合わせを筆笥の一番下から順番に頭の中で行ってやって時間をやり過ごしたりするのですが、今回はそんな方法も機能しません。そもそも、着物のことなんか考えていられない！って感じでした。

そして、ようやく、うとうとできた頃に朝がきました。

本当に不思議なことに、太陽の光が見えた瞬間、不安がスーッと消えていきました。さらに、あんなに飲みたかった水も、飲めるようになると、もうそんなに欲しくなくなっていました。

旦那に「あんなに飲みたがっていたんだから、もっとがぶがぶ飲めよ～」と言われても、もういいや～って感じでした。

そこからは、睡眠薬や鎮痛剤ももらったので、夜グーッと寝て、グングン回復していったのです。さらに、看護師さんから、2日目くらいに「私、手術の日の担当だったんですけど、あの状態からここまで、織さん本当に元気そうになって良かったですね」と言われて、この言葉に改めて感激しました。病院に来て驚いたのは、スタッフの皆さんが、私が元気そうになったり、顔色がよくなったり、調子がよさそうだと、本当に嬉しそうにしてくださること。担当の先生にも、「織さんは、どんどん良くなっていくのでやりがいがあります」と言っていただけでしたが、そんな風に医療スタッフさんが患者の回復を喜んでくださっているなんて思ってもいなかったもので、とても心強く思いました。



大変な一晩で、改めて太陽の光がどんなに人の不安を和らげてくれるものか、夜の闇がどんなに怖いものか、医療スタッフさんの回復を願う気持ちがどんなに元気づけられるか、改めて気が付かされたのです。いまさらですが、人は痛い思いをしないと分からないことが、随分あるものですね。

さて、あと2回を「楽しい回復期」「気になる医療費用のこと」と続けていきたいと思えます。

写真は、昭和記念公園のコスモス。ちょうど、最後の満開の時期にお天気にも恵まれました！仕事をしながら風景写真を趣味でとるのは、もうピンポイントでお天気と花の時期がうまく重なるかの運につきますね。もっと沢山写真撮っているので、良ければ[ブログ](#)で見てくださいね。

⇒ [バックナンバー](#)

■ 編集後記

最近、気になるテレビドラマがあり、ついテレビの前に釘付けになっています。おかげで一週間があつという間にめぐって来てしまう感じで、いろんな意味で複雑です。そうは言いながらも、メルマガの読者に「次週が楽しみ」と思われるような話題を提供していくよう毎週編集会議を重ねています。今週のトピックスは、ビルディングエンベロップについての建材シンポジウムの話でした。ビルディングエンベロップとは、聞きなれない言葉ですが、窓や外壁を含め、省エネを考える上でも欠かせない役目を果たすものであることから、多くの建築関係者が熱心に聞き入っていました。(HI)

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)



◆編集責任者 事務局長 東 幸次

■東京都中央区新川 1-4-1

■TEL 03-3297-5601 ■FAX 03-3297-5783

■URL <http://www.vec.gr.jp> ■E-MAIL info@vec.gr.jp